

山口県 周南農協

〒744 山口県下松市西柳2-3-47
☎833-41-3100

▽信用事業で立て直し
タバコを手に、職員にこうハッパをかけるのは、95年に徳山地区4市2町の11農協が合併して誕生した山口県周南農協の徳本豊組合長である。全国「千農協」の中でここまでコスト意識が旺盛な組合長は珍しい。都市で銀行などと凌ぎを削る農協かといえはそうでもない。瀬戸内海沿岸の周南工業地帯を中心に都市型、中

「うちはね、毎日1、000万円もカネがいるんだよ。土曜も日曜も盆も正月も関係なしにね。1秒でいくらになるのか。115円になるんだ。2秒でこのタバコ一箱のカネが消えてなくなるんだよと、職員に言い聞かせているんだ。裏を返せば、その分だけ毎日儲けないと、農協の経営は成り立たないということでもある」

徳本組合長が、住専処理に不満なのは、住専向け損失処理で信連の経営が一律に悪化したことである。信連の損失分担保で農協への配当が減った。住専問題が起きる前の山口県信連の農協への配当は年4%だった。それが住専処理にケリがついた後の決算では3%しかない。それに金融機関の不良債権処理を進めるため、信連は単協の預け入れ金利をガクンと下げてしまった。それが最近では信連に預

「あれだけ国民にも迷惑をかけたんだろ。農協のトップは、悪いことは悪いでスッキリ責任を取るべきだったよ。あんな融資をさせたのは、俺の責任だったとね。トップがケジメをつけておけば農協には迷惑はかからなかった」

間型、農村型の地域が混在する貯金高1、200億円の信用事業中心型の農協である。徳本豊組合長は、旧熊毛町農協で組合長を二十数年以上も務めたバリエリの農協マンである。

農業評論家 土門 剛

どもん たけし/1947年大阪府生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。「省益に走った農水官僚の100日」(中央公論94年3月)、「食管死守で焼け太る農水官僚」(This is 読売94年3月)、「懸案見送られた食管改革」(同94年7月)、「食管制度のあり方に関する調査懇談会」(エコノミスト94年8月)など、農業や農協問題についての規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆。主な著書に、94年1月「農林中金の憂鬱」(日経フィナンシャル94)、93年10月「市場開放決断の日」(日本経済新聞)、92年11月「農協が倒産する日」(東洋経済新報社)、「穀物メジャー」(共著/家の光協会)、「東京をどうする、日本をどうする」(通産省八幡和男氏と共著/講談社)、「新食糧法で日本のお米はこう変わる」(東洋経済新報社)など。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。

金融ビツクバン目指して 地域に密着した事業展開

良い農協はこうが違う！
エグゼレント農協探訪記 ⑭



「うーん、まいったな。銀行だって株主への配当は5%か6%だろう。それが3%じゃなあ。それに預け入れ金利が安すぎる。いま信連に預けても0・35%しかないらん。これに奨励金を入れても1%ちよつとじゃないか。これじゃ農協の経営はできんね」

奨励金を入れて1%ならまだましな方だ。熊本県の農協は0.7%から0.8%しかない。7%も8%の時代もあった。単純には比較できないが農協経営は隔絶の感がある。本当に農協は火の車だ。そんな難しい金融情勢での合併スタート。それを舵取りできるのは、「熊毛の徳本しかおらん」、この声で初代組合長が決まった。地元では誰もが徳本組合長の経営手腕と人柄に太鼓判を押す。その徳本組合長は、



徳本豊組合長

合併満一年を迎えた昨年、特別企画を二つ打ち出した。

懸賞金付定期積金「花いちもんめ」と、地元自動車ディーラーと提携した独自の「マイカーローン」である。いずれも合併後初めてのボーナス期にぶつけた。実施期間は、花いちもんめが8月の1ヶ月間、マイカーローンは7月から9月の3ヶ月間だった。商品内容を簡単に説明しておこう。

花いちもんめは、3年もの定期積金。金利は通常の3年もの定期積金の店頭表示金利より高め。先着960名で1口(月額2万円)につき9回の抽選がある。商品は、エリア内にある「都濃肥牛」と北海道産の毛ガニ2匹が用意されている。

マイカーローンは、融資限度額が300万円。返済期限は5年以内。担保・保証は原則不要である。ただし山口県農業信用基金協会の保証を受けることが前提だ。期間中に借りると、最優遇金利が、基準金利6.4%に対し4.3%と超破格金利となった。その時、「キャンベーン特別軽減12%、給与振込実施者0.5%、五大公共料金振替決済実施者(3つ以上)、定期積金契約額(50万円以上)、長期共済契約者、自動車共済車両契約者、短期共済契約者(自賠責などを含む)」の組合員には、最大17%まで金利軽減するシフトを敷いた。徳本組合長は、「これじゃ山銀もついてこれんじやろ」と胸を張る。

山銀とは、地元・地銀の山口銀行のことである。行風がおっとりしているらしい。山口県周南地方では、金利のペースメーカーはいつも周南農協である。貸し

出しても周南農協が金利を下げてくれば山銀が追随する。そんなパターンのようだ。マイカーローンもそうだ。山銀も同じ商品が扱っている。金利は山銀に軍杯が上がるが、これも徳本組合長によればカラクリがあるそうだ。

「保証料がローン金額の3%加算されるんですよ。うちは1%。それを勘案すればトータルでトントンかそれ以下になるはずだよ。その金利を山銀さんは優良顧客しか出していない。うちは組合員なら誰でもオーケーですからね。農家でない人も出資金を5000円出してもらえれば准組合員になります。5000円出してても安いんじゃないでしょうか」



ローンの門戸を開き金融機関としてアピールする

▽金融機関としての将来

徳本組合長にも悩みはある。農協金融が抱える貯貸率の低さである。今年1月

末で22・1%だ。農協は1,201億円集めて組合員への貸出は248億円しかない。残りは信連へ預け入れるのだ。それが市場最低の低金利だ。しかも利用高配当や奨励金は雀の涙ほど。そこで徳本組合長が考えたのが、急がば回れの如く、地道に貯貸率を上げることだった。それが新商品「花いちもんめ」と「マイカーローン」だった。徳本組合長は、これでもまだ不十分と考えている。

「かねがね二つのことを職員に言っているんだ。ひとつは、コストの問題だ。定期貯金を1000万円もらつてきて、そのコストはいくらか考えて見ろよとね。とにかく資金原価をきちんと計算させるとね。もうひとつは農協のあり方だよ。ここはこれといった農業はない。生き残るには地域の金融機関として地域に密着した事業展開を図ることしかない。じいちゃん、ばあちゃんの金融機関から脱皮しないとね。地域金融機関としても見放されてしまいかねない」

農協には独自のイメージ・キャラクターがある。「隣の若菜さん」というのだ。20歳前後の眉毛の太い若者をイメージしたものだ。それに男の子の「周くん」、女の子の「南ちゃん」もいる。地域の若者に食い込もうという意気込みがひしひしと伝わってくる。これだけアグレッシブな農協は滅多にはない。

徳永さんの攻め口はマイカーローンである。これには町の消費者金融並みに簡単に貸すことにしている。審査に3、4日もかかっていたら、すぐに逃げられてしまう恐れがあるからだ。

合併農協にとつて最大の懸案は、合併

による人の水膨れ体質をいかにスリムにするかだ。今年3月末では正職員371人、パート約80人。正職員を330人体制にするのが当面のリストラ策だ。そのため今年度の正社員は13人に抑えた。リストラ進行中も、渉外セクションだけは減らさない。銀行でいえば営業係のことである。攻める時は徹底的に攻める。これが徳永組合長の身上である。いま徳永組合長が狙っているのは、将来の有望マーケットの福祉と農住である。とくに福祉は、女性部というセクションで13人の職員にホームヘルパーの資格を取らせた。2月にその発表式もやった。徳永さんの戦略は、高齢者が持っている資産を農協で管理するというのである。

「独居老人が多いんですよ。この地区も。そんな独居老人を集めて会食会をやる。そうやって皆さん方のニーズを汲み取っていく。何かあればホームヘルパーを派遣する。そうしてコミュニケーションをとりつつ、資産管理の面で何かお役に立ちたい。そう思っているんです」

福祉には郵便局も名乗りを上げていく。どこも金融ビッグバンで狙い所は同じだ。どれだけ顧客のニーズをつかみきれるかがポイントになっているのだ。最後に徳永組合長はこうつけ加えた。「金融ビッグバンは何でもありだろ。銀行が証券をやる。生保が銀行をやる。外資がドンドン入ってくる。よく考えてみれば、信用・共済・経済の各事業を抱える農協は、形だけは金融ビッグバンを先取りした格好なんだ。それをうまく活かすかどうかは組合長の経営手腕にかかっているのではないかな」